

明治政府の神仏分離と祇園祭

エオトヴェシ・ロラード大学大学院言語学科
日本文献学博士課程
レスチャン・アニタ

1868年、明治の日本はアジアで最初の西洋的国家体制を有する近代国家へと変貌した。これによって日本の官制や産業や経済や教育や外交や宗教などが大きく変化した。日本人の生活は大きく変わった。

明治維新により変わったものの中から宗教の神仏分離について、第1部では神仏分離のことを一般的に、第2部では祇園祭を例にして、その祭から見える神仏分離の影響を説明したい。

1.神仏分離

神仏分離について話すまえに、まず簡単に神仏習合について述べる。神道と仏教が分かれる前に、日本人は千数百年間神道と仏教をあまり分けずに生活していた。以下の説明で神仏分離が日本人にとってどれほど困難だったか理解いただけると思う。

神道は日本の国土に生まれ育った自然発生的信仰である。古代から現代まで神道は多神教である。6世紀に、インドから中国、朝鮮を経て、日本に仏教が伝えられた。6世紀末、17条憲法にみられるように、仏教が定着した。弥生時代に現れた神道と仏教が習合した。

ここでも日本人の態度をみることができる。日本の生活や宗教や思想になかったことを、つまり外国から来たことを受け入れて、日本風に変化させる。文字も宗教も同じような道を辿った。仏教と共に文字も日本に伝わった。日本の貴族階級は漢字を書くようになった。しかし、「自分たちは中国人ではないのに、どうして中国人のように漢字を使わなければならないのか」というような意識が発生し、漢字から日本の字の平仮名と片仮名が作られた。その中でも日本字と言って、片仮名の役割は外来語を表すことになった。言い換えると、外国の文字が日本に入って、それを使いながら、日本人は平仮名と外来語を表す片仮名を作った。外国のものを日本風にしたと言える。この傾向は宗教でもみられる。

宗教にも、国風化への試みがみられる。もともと日本にあった神道と外国から入ってきた仏教が習合した。しかし、仏教がメインなのか、神道がメインなのかは、時代によって変わった。平安中期に仏が神の本地¹で、神は仏の垂迹²だとする本地垂迹説が成立した。しかし、平安末に、対応関係、つまりある神の本地はある仏だと思われ、こうした状況は明治維新の神仏分離まで続いた。

¹ 本地：仏・菩薩が衆生済度のために仮の姿をとってあらわれた垂迹身に対し、その本源たる仏・菩薩をいう。

² 垂迹：仏・菩薩が衆生済度のために仮の姿をとって現れること。本地垂迹説では、日本の神は仏・菩薩の垂迹であるとする。

約 12 世紀のあいだ、神道と仏教が同様に信じられていたと言える。「神道は日本人の宗教で、仏教は外国の宗教だから、分別しなければならない」というアイデアが 17 世紀に発想された。神仏分離がもっとも早く行われたのは水戸藩であった。徳川光圀³ (1628–1700) は 40 年間水戸藩の藩主であった。光圀は初めて寺院の現状を調べ、領内の寺院や神社の成立年代調査をした。光圀は寺院整理対策として「村ごとに寺は必要ではなく、近村に残った寺があればいい、葬式もそこへ行って、行えばいい」と指示した。この考えで、光圀は水戸藩にあった 2377 ヶ寺の内、1098 ヶ寺を処分した。光圀と同じように、岡山藩の藩主である池田光政⁴ (1609–1682) は寺院整理として岡山藩にあった 1035 ヶ寺の内に 598 ヶ寺を破却した。

寺院整理対策で数多くの僧侶たちが還俗させられ、帰農させられた。つまり、僧侶の身分が変えられ、農民身分になったのである。

以上により、神仏分離のことを始めて考えたのは明治政府ではなかったことがわかる。しかし、それを法令として実施したのが明治政府だった。明治政府の神仏分離政策を述べてみると、以下のようなものである。

- ・ 僧侶が還俗した。そして神主の身分が独立した。
- ・ 仏像を神体としている神社は神体を取り替えるようになった。
- ・ 仏教の用具をすべて神社内から追放するようになった。
- ・ 神社の前に仏像を置かないようになった。
- ・ 仏教的な用語を神号につけかえるようになった。
- ・ 仏教的な神名を変えるようになった。
- ・ 神社で仏教の儀礼が廃止になった。

明治元年より 9 年ごろまで全国各地で寺院の破却が続いた。民衆が明治政府の対策を廃仏毀釈として受け取って、廃仏毀釈運動をし、堂塔、仏像、仏画、絵巻物、経典などを破却または焼却した。民衆の廃仏毀釈の運動に対して、神仏分離が廃仏毀釈ではないと説明した。しかし、廃仏毀釈運動の結果は多くの貴重な古文書、文化財の喪失で終わった。

次に祇園祭を例にして、神仏分離の影響を詳しく説明する。

2. 祇園祭と神仏分離

短く祇園祭をまとめると、次のことが言える。

平安時代の日本人は流行する疫病を怨霊の祟りが引き起こすものと考えた。民衆は怨霊を鎮めて疫病をなくすために御霊会を行った。やがてそうした日本の御霊信仰とインドから日本に入って来た牛頭天王信仰が結びついた。878 年頃に祇園寺(八坂神社)が建てられ、牛頭天王を祭るこの場所が祇園祭の祭神の地となった。それから歴史の流れとともに祇園

³ 徳川光圀(とくがわみつくに): 江戸時代前期の常陸国水戸藩主。寛永五年(1628)六月十日水戸城下の家老三木之次(ゆきつぐ)の家に生まれる。徳川家康の第十一男頼房の三男、母は谷久子(靖定夫人)。

⁴ 池田光政(いけだみつまさ): 江戸前期の備前岡山藩主。輝政の孫。

祭で出される山や鉾は外国の材料を使って目立つものになっていった。祇園祭は 15 世紀の応仁の乱によって中断されたが、33 年間の中断の後、祇園祭は再び続けられるようになり現在に至っている。

しかし、明治神仏分離の面から見ると、変更を要求された点が三つあった。それは祇園寺、牛頭天王と祭りである。

まず、祇園寺が明治維新の前後にどう変わったか、見てみよう。

祇園社にはかつて神仏習合によって神祕的性格と寺院的性格があった。神祕的性格があったことは二十二社⁵の一つに数えられ、祇園社が神社として尊崇されたということから分かる。寺院的性格があったことは祇園社に社僧がいたことや、社内に仏像や仏具などが置かれていたことによって分かる。また先にひいた『二十二社註式』に書いてある観慶寺はもともと寺として建立された。そしてその境内の天神堂で天神が祀られた。『社家条々記録』⁶によると、貞観 18 年奈良の僧円如が堂宇を建立して、薬師如来⁷や千手観音⁸などの像を安置したが、その年夏 6 月 14 日天神が東山の麓の祇園林に垂跡されたという。

このように祇園社は神祕的性格と寺院的性格を同時に持っていた。八坂神社の古い姿が分かる元徳 3 年 (1331) に絵師隆円に描かせた古図⁹がある。この古図が重要文化財となっている。この古図を見ると、本殿や南門や舞殿の位置は現在とほとんど変わらない。しかし南門を入ると中門があり、中門から回廊が舞殿を取り囲んで、本殿につながっている。中門や回廊は江戸時代に焼けて、現在は残っていない。また本殿の西に楽師堂や鐘楼や常行堂、東に経所や北西に多宝塔が描かれている。これらが仏教の建造物で、明治維新まではあったが、神仏分離政策により取りはらわれた。

明治 2 年 (1869) 3 月に大きな変化が行われた。

- ・ 神祕事務局によって殿内に祭られていた仏像や仏具を取り除くように命令された。
- ・ 祇園寺の称号を変更するように命令された。それまで祇園社あるいは祇園寺と呼ばれていたこの社寺の称号は八坂神社になった。
- ・ 祇園社の社域は 49903.78 平方メートルだったが、官制施行とともに明治 5 年(1871)3 月 15 日 20073.9 平方メートルが境内地となって、境内地以外の土地は京都市に払い下げられて、円山公園となった。

次に、祇園祭で祭られた牛頭天王の変化を見てみよう。

⁵ 古代末期以後、中世に朝廷より特別のあつかいを受けた神社のこと。その神社は時代とともに 22 社に限られるようになった。1081 年 11 月に 22 社の制ができ、この数のまま 1449 年 8 月まで続けられた。

⁶ 鎌倉時代の末の成立で、祇園社社務が記した社の歴史の記録。

⁷ 菩薩であった時、十二の大願（仏が衆生を救おうとする願い）を發して、病苦の衆生を救い、さとりに至らせようと約束した仏。古来医薬の仏として尊信された。その像は左手に薬壺を持つ。

⁸ 千手千眼観自在菩薩の略称である。千手観音はすべての衆生を救うために、身に千の手と千の目を持った姿である。千の手と千の目は衆生の苦しみを除き、楽しみを与えること、またはこまっている人や不幸な人を助けることのはてしない働きを表している。

⁹ 景山春樹氏「祇園社の古絵図」（『神道史研究』第 6 巻第 6 号所収）によると、この古図は正安 4 年 (1302) に描かれたものを模倣したもので、正安のものは寛和 2 年 (986) に書かれたものをもとにしている。従ってこの古図に書かれた風景は平安時代後期の様子を伝えていると分かる。

牛頭天王という神は、祇園祭の始まりに深く関係していて、非常に重要な意味がある。それは牛頭天王信仰が御霊信仰と結びつき、牛頭天王を祭った祇園社が祇園祭の祭神の地になったからである。

牛頭天王について各種の説話が残っている。たとえば、『積日本紀』¹⁰所収「備後国風土記」¹¹では、牛頭天王を武塔天神とも呼び素戔嗚尊と同化したことを記し、更に蘇民将来の説話を伝える。『二十二社註式』所収「神社本縁起」では、昔北海にいる武塔神は南海の女に通っていたと書いてある。『色葉字類抄』の「祇園」の項には、天竺の北方にある九相国の牛頭天王、別名武塔天神は、沙渴羅竜王の娘と結婚して、八王子が生まれたと書いてある。また陰陽道の教典の一つである『篋篋内伝金烏玉兔集』¹²には、北天竺にあった摩訶陀国王舎城の大王はかつて天刑星であったが、娑婆世界に下生して牛頭天王と呼ばれたと記されている。

天刑星武塔天神とも呼ばれた牛頭天王はどんな神であるのか、『篋篋内伝金烏玉兔集』の内容から要点をまとめてみよう。

- ・北天竺にあった摩訶陀国王舎城の大王であった。
- ・摩訶陀国を礼儀正しくおさめる大王であった。
- ・ひどい牛の顔をしていたので、妻はいなかった。
- ・牛頭天王は、妻になる女がいる所へ行く途中で、宿をことわった巨旦将来をほろぼして、宿を貸した蘇民将来に対し、子孫を疫病から免れるようにする約束をした。

以上から分かるのは、牛頭天王が北天竺にあった摩訶陀国の名君で、妻を探す途中で宿をことわった心の冷たい巨旦将来をほろぼしたのだが、この巨旦将来の征伐によって疫病になったということである。

それに対して素戔嗚尊¹³はどんな神であっただろうか。『日本書紀』¹⁴から要点をまとめてみよう。

- ・天照大神と月読命の弟である。
- ・亡くなった母に会いたくて、そのことばかり考えていたので、与えられた海原の統治を怠った。それで神の国から追放された。
- ・天照大神が住んだ高天の原でも罪を犯して、手足の爪も抜かれ、高天の原からも追放された。
- ・新羅国に天から降りて、曾戸茂梨という所に着いた。そこから船に乗って東に渡って、出雲国の肥河に着いた。
- ・出雲国で奇稻田姫を八俣の大蛇から救出した。

¹⁰ 鎌倉時代に書かれた『日本書紀』の注釈書（全28巻）。著者は卜部兼方。

¹¹ 「風土記」は奈良時代に各国で編さんされた地誌。備後国は現在の広島県東部。

¹² 暦とト占の書。日本成立の陰陽道書の代表といえるもの。安倍晴明の撰に仮託した偽書。流布本（広く世に行われている本）は5巻であるが、「篋篋内伝」「篋篋内伝金烏玉兔集宣明歴経」「三国相伝陰陽轄篋篋内伝金烏玉兔集造屋篇」などの異名抄本（原本である書の一部を抜き出した物）が現在し、それによって本書の成立事情と作者が検討されている。

¹³ 『古事記』に須佐之男命、『日本書紀』に素戔嗚尊として記されている。

¹⁴ 日本最初の編年体の歴史書。720年舎人親王らが完成。

・奇稲田姫と結婚して、葦原中国の基を作った。

以上から分かるのは素戔嗚尊が元々荒々しい行為をしたり、罪を犯したりした神であったことである。しかし後には奇稲田姫を手助けするような親しみのある神になった。

つまり牛頭天王も素戔嗚尊も性格に変化がみられるのである。牛頭天王の場合にはやさしかった心が荒れて、素戔嗚尊の場合には荒れていた心がやさしくなった。心の変化の仕方は逆であっても、それは牛頭天王と素戔嗚尊の一つの共通点になったと思われる。

明治時代の神祇事務局によって「牛頭天王」というような仏教の用語で神を呼ぶのを禁止することが指示された。これにより、明治以降、八坂神社で牛頭天王の神明が消え、代わって素戔嗚尊を祭るようになった。

最後に祭りの変化を見てみよう。祭りも明治維新によって変化した。祭りは神社において公費で行われる祭りである官祭¹⁵と神社で公式の祭り以外に行なう祭礼である私祭に分けられた。

明治以後宮内省から幣帛を神に供えた神社のことである大社、中社、小社の官幣社があった。第二次世界大戦後、この制度はなくなった。

八坂神社は明治 4 年（1871）5 月 14 日に官幣中社に列せられて、大正 4 年（1915）11 月 10 日に官幣大社に昇格した。昭和 20 年（1945）8 月、日本は第二次世界大戦に負けたために、12 月の神道指令にもとづいて、昭和 21 年（1946）八坂神社も国家の管理を離れて、社格を失った。

このレポートで明治神仏分離とそれによって変化したことを具体的な例を出して、まとめてみた。しかし、寺と神社の分離が簡単に実施できただろうか。仏像や仏教の道具の破却、僧侶の還俗、仏教の神明の禁止などは簡単にできたと言えるだろう。しかし、民衆の立場から考えてみよう。例えば祖先のお墓が寺にあって、それをまもっていたのが僧侶であった。しかし、急に神主がやっても、日本人は納得するだろうか。外観的に変化があっても、日本人の心の中はあまり変わらなかったと思われる。だから、日本人の宗教性は仏教でもない、神道でもないということである。「何の宗教を信じていますか」と日本人に聞くと、日本人は、どちらも信じていない、仏教を信じています、神道を信じていますと答える。面白いのが、正月の初詣に神社に参詣する日本人が少なくないことである。明治以前、神社の寺もあったのが原因だと思われる。日本人は行くところが神社や寺になっても、心が一番大事だと考えていると思われる。

¹⁵官祭は祈年祭と新嘗祭と例祭と元始祭と天長節祭で、その他の祭りは全て私祭となった。

参考文献

- 安丸良夫（著）（1979）『神々の明治維新』岩波書店
圭室文雄、（1977）『神仏分離』、教育者
国史大辞典編集委員会（1990）『国史大辞典』第十一巻、吉川弘文館
小野泰博（著）（1985）『日本宗教事典』、弘文堂
大島建彦（著）（1971）『日本を知る事典』社会思想社
八坂神社編（1997）『八坂神社』学生社
遠日出典（1986）『神仏習合』六興出版